

大内宿

茅葺き屋根の伝統的な家屋やお店が立ち並ぶ大内宿では、江戸時代（1603～1867）の本格的な日本の古い宿場町の町並みを体験できます。町は主要な観光名所ですが、ほとんどのショップ、レストラン、その他の施設を運営する人々のコミュニティの住宅地でもあります。住民の多くは、大内宿に何世代にもわたって住んでいます。下郷の美味しい郷土料理やお土産を探しているとき、地域の文化や歴史を深く掘り下げたいとき、大内宿を訪れることを強くお勧めします。町では一年を通してさまざまな季節のイベントやお祭りが開催されます。

過去の保存

大内宿は 1640 年頃に設立されたと考えられており、会津若松（福島県）と日光（栃木県）の町を結ぶ主要なルートに位置することから、時とともに繁栄しました。江戸時代には、ほとんどの人が徒歩で移動した為、多くの宿場町は、それらの疲れた旅行者に食べ物や宿泊施設を提供するために発展しました。明治時代（1868～ 1912 年）には、新しい道路や鉄道の建設によりポストタウンは徐々に衰退しましたが、インフラ開発は比較的遅れて大内宿を迂回しました。この地域は、1981 年に政府によって伝統的建造物群の重要な保存地区に指定されました。

コミュニティの協力

町の独特の雰囲気を保つために多大な努力が払われてきました。電話回線やケーブルは、メインストリートでは埋められているか隠されています。地域住民の間には、伝統的な“ゆい”（相互扶助と支援）の概念が今も残っています。“ゆい”の精神は農業のコミュニティにルーツを持ち、すべての当事者の相互利益のために平等に労働を交換する慣行に基づいており、それによってコミュニティの社会インフラの維持を支援しています。建物の茅葺き屋根は約 400 年もの間同じスタイルを保ち、住民は必要に応じてそれらを交換して修理し、ゆいの精神で協力しあっています。これらの屋根は、いくつかの日本の草の総称であるカヤから作られています。茅は、夏は家を涼しく、冬は暖かく保つのに役立ちます。火災は常に警戒されており、町には独自のボランティア消防団があり、必要に応じて迅速に行動を起こすことができるようになっています。また、9 月 1 日には毎年恒例の「散水式」で各住居外への給水試験を行い、来場者に人気のイベントとなっています。

地元の料理

メインストリート沿いの家の多くは、ショップやレストランとして機能しています。蕎麦が人気で、箸の代わりに長ネギで蕎麦を食べることに挑戦できます。その他、町には初期の西洋様式の建築が特徴的なエレガントなカフェのほか、カジュアルな食事や軽食に最適なさまざまな屋台の食べ物もあります。人気商品のひとつは、下郷の代表的な料理しんごろうです。贈り物やお土産を探しているなら、小さなおもちゃやノベルティに加えて、陶器や布製品などの伝統的な工芸品を売っているお店もあります。

地域のランドマーク

今日、大内宿は主に宿場町として知られていますが、過去には多くの住民が農林業で生計を立てていました。町の博物館である大内宿町並み展示館では、地域の歴史や日常生活の遺物を見ることができます。かつて本陣と呼ばれていた建物であり、江戸時代には大名をはじめとする高位の人々が利用するための宿でした。伝統的な茅葺き屋根に加えて、本陣は、熱、光、そして食事の準備のための手段を提供したであろう、囲炉裡（いろり）を備えています。囲炉裏は、床に設置された四角い石で裏打ちされた穴で、鍋ややかんを、囲炉裡の火の上にあるフックに吊るすことができます。

町を見下ろす小さな山を登ると、300年以上にわたって村を見守ってきたとされる阿弥陀如来を祀る、正法寺から大内宿が一望できます。町の中心部からのもう一つの楽しい散歩は、杉の木の小さな森を通り抜け、高倉神社に通じています。この地域に一晚滞在する場合は、暗くなってから大内宿を体験することも是非検討してください。地域の保存努力のおかげで、かつての宿場町はまるで1世紀以上前のその時と同じように見えるでしょう。

季節を祝う

大内宿には、年間を通して行われるイベントやお祭りがたくさんあります。

高倉天皇は、毎年7月2日に真夏の祭りを祝い、後白河天皇（1127-1192）の息子である以仁王（1151-1180）を称えます。村の男たちは大内宿の周りで厳粛な行列を作り、家計の安全と豊作を祈ります。

冬には、住民や観光客が雪まつりを楽しめます。雪まつりは、町が大雪に覆われることが多い2月の第2週に開催されます。住民は雪から手で提灯を彫り、通りに沿って配置し、聖なる炎で順番に灯籠を照らします。花火が夜空を照らし、灯籠と手付かずの雪の美しいコントラストを引き立てます。